

音楽教育とハイテク

Music Education and High-technology

鈴木 寛 (兵庫教育大学名誉教授)

評価とハイテク (10)

楽しければ結果は付いてくるか

絶対評価は自動車学校の評価の基本です。技能や知識を教える科目は基本的にすべて絶対評価であるべきです。といいながらも現実問題として現場の中学校ではまだこの評価を内申書にまで広げて運用している所は少ないようです。ところが先日第二回の全国学力テストの結果が発表されました。大阪府の橋下知事がその結果を市町村単位で発表するように改めて要望していたのを見ても分かる通り全国という大きな単位よりも市町村という単位の絶対評価が本当に役に立つ(実際には学校単位や学級単位の方がもっと役に立つ)からです。

読み書きそろばんという国民に必要な基本的学力を小六と中三だけに限定して調査するこのテストは、昔は学校間やクラス間の過大な競争の結果、学力の劣る生徒をテスト当日欠席させてまで成績を上げようとした程過熱しましたが、今回も東北や日本海沿いの県がやはり平均点が高いという結果が出ていました。今はどうか知りませんが10年位前までは岩手県の盛岡市には学習塾らしきものはありませんでしたし、放課後子どもたちは職員室の先生を訪ねてその日分からなかったことやもっとやりたかった事を先生に教えてもらっている風景を目にすることが出来ました。このことが東北地方の学力が高いことと直接関係があるとは思えませんが、東京都の子どもたちも意外と健闘しているのを見ると都市や農村という環境は関係がないように思われます。

パイプオルガンが設置された公立の小学校がある秋田県などでも教育にお金をかける意欲はすごいものがあり、現在全日音研という全国規模になった音研の前身は東北音研だったことから考えても郷土を上げて教育に熱心だったことが伺えます。NHKのコンクールも過去には東北地方が殆ど優勝し、現在でも各種音楽コンクールにおける東北地方のレベルの高さはすごいものがあります。この教育に対する「熱心さ」

こそが子どもたちの学力を支える重要な要素であることに間違いはありませんが、学力テストの結果を見て教師や地域の不熱心さを嘆くのも間違いです。学力テストの結果を「教師の熱心さ」や「教え方のうまさ」だけに起因すると考えるのは危険ですし、まして設備や教材を充実させる謂わばお金で何とかなることで解決しようとするのは恐らく期待はずれな結果となるでしょう。

教育は自然科学でもなければ社会学でもありません。まして音楽教育はその必然性も含めて科学によって導かれるものではありません。だからといってすべては経験主義的なサバイバル理論による才能教育でもありません。私も長年音楽教育に携わってきましたが、昔の教え子で現在音楽教育に携わっている人たちと話し合っていると必ず「音楽教育って本当に必要なの?」という話題になってしまいます。仮に必要であるとしてももしそれなら何故現在国連加盟国の1割にも満たない国しか義務教育に音楽科を課していないのか説明出来ませんし、世界最高水準の音楽教育システムを学校教育に展開しているこの日本という国の音楽の文化的レベル(学力テスト?)の低さや音楽業界の不振は不思議です。もし音楽が学力テストに組み込まれたら何を教え、テスト結果は何に反映させるのでしょうか。

「楽しければよい」とか「自由にやらせれば良い」などと「創造的音楽学習運動」を展開してきた教師グループは今ではすっかり衰退し、「支援」こそが教師の仕事等と言っていた文科省が「支援という言葉は排除する方向性」を打ち出しここ20年ほどの音楽教育は混迷の極みでした。その中で唯一の収穫はシンセなどの電子楽器が教育用楽器として市民権を得たことで、足踏み式デスクオルガン以後足踏みしていた鍵盤楽器の利用が活発化したことでしょう。さらにIT教育の一環にDTMも教材化され音楽教育の多様化に拍車をかけました。

この多様化こそが評価を複雑にしてしまった原因なのですが、戦前の唱歌科は戦後音楽科の一領域になり、歌うという能力の評価が軽視されてきたきらいがあります。反面器楽教育は非常に盛んになりましたが、リコーダや鍵盤ハーモニカという廉価な楽器から先の展望を欠き画一的で退屈な教科というそしりを受けることになりました。その反動こそが先に述べた楽しければ良いという考え方の根底にあるのです。授業が楽しければそれに超したことはありませんが、ただ楽しさだけを追求するという間違っただけが評価の対象となり、教師はひたすら子どものご機嫌を伺うというジレンマに陥ります。

料理の素材を工夫次第でおいしい食物にできるというのと同じ意味で教材を工夫次第で楽しく展開出来るというのならわかりますが、調理方法の工夫もしないで次から次へとレトルトパック商品を並べたり、調理もしないで生に近い素材を提供するという教師の工夫や技能を育てようとしなかったここ数年の音楽教育は悲劇としか言いようがありません。8月号で述べた【意欲】の5つの行動的側面の1つである「楽しむ」は他の「工夫する」「耐える」「冒険する」「助け合う」等の行動と同時に見られるのが普通で、本当に子どもが楽しく学習した結果学習意欲が喚起され学習の目標が達成されたと言うのなら結構な事です、ただ退屈しないで授業が済んだと言うのでは大間違いです。

教材の質と量

さて、授業では教材を用いて学習が進められますが、教材には **事例** **情報** **媒介** **媒体** という4つの機能があります。の事例というのは、例えば実際の曲そのものであったり、楽譜であったりします。の情報は、ベートーベンの生い立ちやその作風の特徴や、楽曲の解釈のような内容を指します。の媒介は、今まで無関係であった事象同士を関係づける働きをもつモノや体験の事です。の媒体は文字通りメディアと呼ばれる物体の事です。

最近の多くの音楽教師は **事例** と **媒体** を重視して教材と称しています。また限られた時数の授業で最小公倍数的な教材を効率よく楽しく学習させることを目的とした研究授業を多く見られます。しかしこれらの教材の多くは知識的内容をベースとして構成されており、結局は【記憶力】のチェックにしか使えないことが多いのです。

社会科の歴史的分野というのは加速度的にその学習すべき事例と内容を増殖させている教科で、このまま増殖を続けるなら将来学校の全授業を歴史の学習に当てても追いつきません。

同じ事が毎日のように膨張する音楽の世界にも当てはまります。今週のヒットチャートを教材化したり、ポピュラーを教材化する根本的な無理はここにあります。それでも、忘れられたり、飽きられたりする結果それ程多くの作品やミュージシャンは残りませんから心配することは無いのですが、あの演歌ですら毎日平均30曲作られていると聞けばわかりいただけるでしょう。

今の時代ネットやその他の **メディア** を通して膨大な量の **情報** が粗大ゴミのように産出されます。その意味では教材の量には事欠きませんが、むしろ不足しがちなのは **媒介** によって形成されるスキーマであり **事例** に含まれる基礎的、基本的な学習内容の質です。

かけ算の九九は九の段までしか覚える必要はありませんしそれも五×六(ゴロク)と六×五(ロクゴ)は同じ答えですからどちらか片方は覚える必要はありません。数学の世界ではこのように学習すべき内容が精選され(精選されすぎて π が3になってしまった)ていますが、音楽の教材はそもそもどんな学習構造を必要とするのかさえ決まっています。世界中の音楽の教科書を見ることは出来ませんが、韓国や中国、台湾、マレーシアなど戦前の日本の音楽教育の名残のある国は取り上げられている曲がやや自国のものに偏りすぎている傾向はありますが、学年別編集や歌唱・器楽などの領域さらに裏表紙に実物大の鍵盤図があるのも日本の教科書にそっくりです。アメリカの教科書は学年別ではなく領域別の分冊になっていて数年使い続けることも計算に入れて丈夫な堅い表紙で出来ています。ドイツのアカデミーが編集する教科書は学年別ですが、段階を追って内容が高度になってゆくのがわかります。「さくら」などの日本の歌も紹介されていますが、彼らはザクラと発音しますので雰囲気は伝わりません。コダーイのシステムやオルフの楽器が中心であったため今でもその名残が見られる教科書も多いのですが、80年代以降リコーダやオルフの音具ではなく電子キーボードによる学習が急速に普及し、教科書の教材もそれに対応しつつあります。管楽器で有名なアレキサンダーの本店でも1階のショールームには所狭しと電子キーボードが並んでいました。

音楽の学習に順序性や法則性があると考えそれを探りながら編集や指導を行っているのがマインツにあるアカデミーですが、そのベースとなっているのがヤマハの音楽教室のシステムがあります。合理性と効率があらゆる分野で要求され、音楽教育もDTMがそのお先棒を担がされていますが、次号では本当の意味での合理化と効率を教材の設定から指導や評価へどう繋げるかをテーマにします。